

複眼

高森町の高森南小学校で、環境に配慮した校舎改修計画や教育プログラムを検討する「学校エコプロジェクト(エコフロー事業)」が昨年末から進んでいる。改修計画は地域の建築業者や教師、住民が定期的に検討会に参加し、省エネルギーの建築技術などを学んだ後、設計業者を決めるユニークな方法を取り、「快適で環境にやさしい学校」を目指している。(中山岳)

住民も協働 校舎づくり

高森南小 エコ改修事業



同プロジェクトは、環境省「エコ改修」と、計画作成で同校や北海道の黒松内中学校など全国十校をモデル校に材として児童や地域で活用する指定している事業。モデル校は「環境教育」の二つを行は三年をめどに、二酸化炭素削減などを目標とした校舎改修計画を作り実施する省が補助する。

約100人が参加した昨年末の第1回エコ改修検討会。高森町福祉センターで

省エネ勉強→設計業者も選定

背景には、一九七〇年代の第二次ベビーブーム前後に全国で大量に建設された校舎が築三十年を経過し、耐震補強などの整備が必要になっていく問題がある。環境省は「建て替えは大量の廃材が出てコストがかかる。エコ改修は、断熱の強化や自然光をより取り入れ照明の電力消費を抑えるなどの省エネルギーの建築技術でより寿命の長い校舎にすること。また、改修計画に参加した地域の技術者や教師が学校で温暖化対策ができることを知り、校舎も教材として環境教育に生かしてほしい」と期待を寄せる。

高森町では昨年十二月から今年六月まで計六回、エコ改修検討会を開催。公募も含め約百人の委員が、氷や熱湯の入ったペットボトルを使った実験などをし、熱の伝わり方をはじめ、省エネルギーの建築技術を学び、環境にやさしい校舎のあり方を議論した。八月に開かれた設計業者選定のコンペには、検討会に参加していた八業者が応募。設計業者を選ばれた飯田市のみず設計の技術提案は、高森町は全国的にも年間を通じ日照率が高いので、太陽熱を利用し夏は冷気、冬は暖気を校内で循環させる「パッシブソーラーシステム」の導入と、間伐材資源を生かしたバレットストロップの導入など十七点に及んだ。同社の松下重雄社長(左)は「先生や地元住民と一緒に理科実験のようなワークショップを行い、環境に配慮した住宅造りのノウハウが学べた。提案にも生かせる。画期的だった」と話す。

検討会に参加した町教育委員会会の松村和憲さん(右)も「〇年代に日本中で建てられた校舎はコンクリートに塗装を施しただけのものが多い。断熱など、は全く考えられていない」と話す。

高森南小など全国のモデル校では改修計画が具

「エコ改修の考え方は、校舎以外の建物にも応用でき、教育の場に生かせる」と手応えを感じている。

検討会座長を務めたものつくり大学の村勉教授は「プロジェクトは校舎改修だけが目的ではない。検討会に参加した住民や専門家が二酸化炭素を出さない技術の理解を深め、仕事や生活に生かすことが大切。今後は、エコ改修の考え方を学校教育に浸透させられるかが課題となる」と指摘する。

町では九月、みず設計やPTA、町職員ら十一人で建設委員会を設置。具体的な改修計画作りに入った。松下社長は「予算のこともあり、構想から絞り込みが必要になる。学校の先生方の意見も取り入れて協力し合い、いい校舎にしたい」と話している。

生きた教材 どう生かす

小中学校を取材する機会が多いが、昨冬に訪れた飯田下伊那の多くの学校で、廊下を歩くたびに息が白く、身を切るような寒さを体験した。

ある建築家は「一九七

取材のふ

〇年代に日本中で建てられた校舎はコンクリートに塗装を施しただけのものがほとんど。断熱などは全く考えられていない」と話す。

高森南小など全国のモデル校では改修計画が具

学校エコ改修は、二酸化炭素の排出を抑えて校舎全体の断熱性を上げることを目指す。子どもたちにとって、環境に配慮した仕組みがらびげなど、今後の取り組みを